
霊能力者紅倉美姫 最期のビデオ

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊能力者紅倉美姫 最期のビデオ

【Nコード】

N13750

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

紅倉美姫最後の番組収録。某社会主義国の独裁者が革命軍に処刑され、その様子を撮したビデオが公開された。そこに不可思議な現象が写っており、紅倉が鑑定を試みる。紅倉の口から長々語られる人の魂とあの世の仕組みの解説。

一、その頃の事情（前書き）

＊これは第1シリーズ最終回に当たる話で、最終作「お札さまの花嫁」（問題がありすぎる内容のため再掲載は見送らせていただきます）の次の話になります。内容は別の作品で取り上げた内容を紅倉が語り直した物です。

一、その頃の事情

約五年間続いた東亜テレビのスペシャル番組「本当にあった恐怖心霊事件ファイル」が三月の放送を最後に終了することが決まった。世間のことさら恐怖感を煽る怪しげな心霊番組を嫌う風潮の中視聴率が下がり続け、昨年末起きた忌まわしき「お札さま事件」に番組が関わったことによるバッシングが決定打となり番組編成会議で正式に番組の終了が決定されたのだ。

「本当にあった恐怖心霊事件ファイル」を初期盛り上げたのが妖艶な女霊能師岳戸由宇（がくとゆう）であり、派手でエキセントリックなキャラクターが面白がられた彼女に対し穏やかな人情派の中年霊能師畔田敏夫（くろだとしお）が番組の良識と品格を保つという布陣であったが、三年目からここに妖精のような欧州ハーフ美人紅倉美姫（べにくらみき）が加わり、彼女は類い希なる霊視能力で実際の警察事件もいくつも解決してカリスマ的人気を獲得し、更に紅倉のアシスタントとして若い美貌の芙蓉美貴（ふようみき）が登場すると、美人霊能師弟のタレント的人気に押されて番組はこの手の内容としては異例の高い視聴率を得るようになった。

芙蓉が登場して一年くらいが番組の人気のパークだった。

しかし近年増加する凶悪犯罪やテロ事件によって一般市民に「恐怖」という感情を厭（いと）う傾向が強まり、番組で取り上げた「九州地方の廃病院」を舞台とした狂気としか言いようのない残虐な事件が発生したこともあり「ほんこわファイル」は急激に視聴率を落としていくこととなった。

霊能師畔田敏夫はその廃病院の事件に関わり瀕死の重傷を負って番組から去った。

元番組の顔であった岳戸由宇も「お札さま事件」で自ら墓穴を掘って表世間から姿を消した。

残る紅倉芙蓉師弟も、この頃私生活に置いてトラブルに見舞われ

ていた。

彼女たちは都内某高級住宅街にある広壮なお屋敷に住んでいたが、これは紅倉の持ち家ではなく、実は某有力政治家の裏財産であるのをただ同然の家賃で借りていたのだが、その有力政治家もここ数年めまぐるしく変わる政局の中で立場を危うくし、もつともそこは紅倉の忠告でなんとか乗り切れることは出来たのだが、その紅倉の忠告で緊急に身辺の整理をしなければならなくなった。この屋敷なども「新政権」にはかっこの疑惑追及のタネで、至急、権利、書類の正常化を図らねばならなかった。

結果、紅倉は三年間住んだお屋敷を出て行かねばなくなり、当然紅倉を姉のように慕う芙蓉も二人の新しい住居を探さなければならなくなった。紅倉に屋敷を貸していた有力政治家は迷惑料と当座のホテル代として多額の現金を渡そうとしたが、紅倉は断った。彼女には新生活に向かつてある彼女なりの野望があつたのだが……、それはここでは関係ないことだから割愛する。

二月半ば、紅倉は番組最後の収録のため東亜テレビのスタジオに入った。

二、歴史を写したビデオ

番組のチーフディレクターであった三津木俊作は岳戸由宇ともども「お札さま事件」の責任を取らされ番組を降板、東亜テレビからも退職させられた。

チーフに昇格したスタジオディレクターの下、最後の収録は寂しい雰囲気の中行われた。

番組の構成は過去反響の多かったネタの再放送が大半で、それではあんまりなので人気の高い紅倉に最後に大ネタの鑑定を行ってもらって締める、というものだった。

紅倉に最後に与えられた大ネタ、

それはこれまでの一般投稿写真やビデオとは大いに趣の違う物だった。

今からちょうど二十年前、ソ連体制崩壊に伴い連鎖的に起こった東欧の反共産主義革命の中で、ある独裁者が射殺された。

その某国は豊富な地下資源を武器に近隣のソ連とも中国とも距離を保ち一国独自の共産主義体制を堅持し、時のニコライ（仮）大統領が「帝国」と称される強固な独裁体制を敷いていた。

他の共産主義国家が続々民主化されていく中、ニコライ大統領は独裁する共産主義体制を最後まで手放そうとせず、徹底した情報管理で国民を外界から遮断し、帝国を維持しようとした。

しかし自由を渴望する民衆は民主主義運動を展開し、これを大統領は徹底的に弾圧した。民主主義運動家を手当たり次第に投獄し、処刑し、それでも言うことを聞かず膨れ上がる民主主義運動集会の

民衆に対し、軍に発砲命令を下した。これを拒否した国防大臣が翌日「自殺」すると、独裁者たる大統領への民衆の怒りは爆発し、大統領の恐怖政治に反発する軍も民衆側に付き、政府施設を占拠、力を得た革命勢力は一気に大統領府に迫り、大統領夫妻はヘリコプターで脱出した。この脱出劇の様子は国营放送を手中にした革命勢力と取材の外国マスコミによって世界中のテレビで流され、人々に現在進行形の歴史を強く印象づけた。

独裁政権は崩壊し、投獄されていた政治犯たちが一斉に解放され、民主化運動の勝利が喜ばれたが、その夜から革命軍と大統領シンパの治安警察の戦闘が始まり、治安警察隊は秘密の地下道を通ってのゲリラ攻撃を展開し、市街地を中心に電撃的に激しい戦闘が繰り広げられた。

逃亡を続けていた大統領夫妻は革命政府により逮捕、拘束された。施設に監禁された大統領は本来であるならば大法廷で裁かれ、その罪を明らかにされて断罪されるべき所であったが、予想以上に激しい大統領派の軍事的抵抗に事を急ぐ必要に迫られ、非公開の軍事法廷で「不正蓄財と国民に対する虐殺行為」により死刑を言い渡され、即刻妻と共に銃殺された。

大統領夫妻の処刑により大統領派の抵抗も勢いを失っていき、五日間に渡り千人の犠牲者を出した激しい戦闘は収束していった。

さて、

紅倉の仕事である。

正義の名の下に裁判で大々的に裁かれるはずであった大統領がほんの数分？の秘密裁判であつと言う間に射殺されてしまったのは、大統領シンパの秘密警察が大統領を奪いに襲ってきて情勢が更に混乱するのを恐れ、また当時ゴルバチョフ最高会議議長の下民主化（

ペレストロイカ）が進められていたとはいえいまだ解体はされていないソ連邦の軍事介入も恐れられ、国内の混乱を早急に納める必要があったからだ。

革命政府は銃殺された直後の大統領の写真を国内外に発表し、抵抗を続ける秘密警察軍にも大統領の死を知らしめた。

それで戦闘が収まったのだからよいのだが、当時から「大統領影武者説」は根強く噂されていた。

逮捕された大統領夫妻が影武者ペアであった、

または、

公開された大統領の死体写真は、生気も抜け銃撃の衝撃で歪み、生前の私の強い面影とは印象が全く異なってしまうていて、

写真は偽物なのではないか？

との憶測もされた。

当時革命政府はその疑惑を強く否定し、実際その後大統領も現れていないから、たしかに写真も死体も本物で、大統領は死んだのだろう。

しかしその後国際経済の荒波に揉まれる同国の経済は悪化し、失業者も増え、少なくとも最低限の生活を保障されていた大統領の共產主義時代を懐かしむ声は一般国民の中にも多い。あの激しい戦闘を伴った革命運動も、実は民衆の不満を利用した体制内の権力争いだったのではないか？とのうがった見方をする者もいて、事実戦闘の死傷者に対する責任の在処ありかを巡る調査も進まないまいうやむやとなり、時の政権下で権勢を誇っていた政治家が新政府に残留しているなど、現在に遺恨を残し、革命の後始末には失敗したと見られても仕方ないだろう。

さてまた紅倉の受け持ち分野から逸れてしまったが、

革命から二十年、大統領の死に関する新資料が公開され、それがまた新たな疑惑を呼ぶこととなってしまっているのだ。

これも当時から噂されていたことであるが、

大統領の銃殺の一部始終を撮したビデオがあるというのだ。

この噂について何故それを公開しないのか？ 公開して根強く
すぶる大統領生存説をきれいに打ち消してやればよいではないか？、
との声が一般市民から新政府に寄せられた。

新政府はビデオの存在を認めず、もしあったにしても故人の最低
限の尊厳を守るため公開はされない、といずれにせよ公にするつも
りはないようだった。

それが、やはり「ある」という事実が明かされ、二十年後の今日、
ようやくそれが公開されたのだ。

そこには確かに寒々とした景色の中に立ち、数発の銃弾を体に受
けてひっくり返り、動かなくなった大統領の姿が映されていた。

カメラは倒れた大統領に歩み寄り、銃撃の跡と顔を確かめるよう
に正面から覗き込む形で胸から上を撮した。この構図は公開されて
いた死体写真といっしょである。

問題はここで起こった。

銃撃を受け、筋肉を弛緩させて顔の相好を崩し、わずかに口から
血を流した大統領が、

カッと目を開き、

もともと白い肌に更に血の気を失って蒼白となった顔を持ち上げ、
わっと口を開けてものすごい表情となり、

次の瞬間には白く薄れて、元の死体の顔になって地面に横たわっ
ている。

カメラはしばらく大統領を撮し続けるが、死体となった大統領はもちろん動かず、そのままおもむろにビデオは終わる。

さて、これはいったいなんなのか？、と見る者は首を傾げるし、これを見た当時の政府要人たちもぎょつとし、ううむとうなり、公開を見送らざるを得なかったのだろう。

今回公開に当たり、この現象は

「カメラの故障により」

と説明された。

カメラの故障により一部乱れがあり、ゴーストが発生している、と。

ゴースト、とはまさにゴーストであるが、テレビのゴースト障害のことを言っているのだろう。アナログテレビでビルなどに電波が当たって跳ね返り、それを捕らえて映像がぶれてしまう現象である。撮影したビデオカメラにそれはないだろうが、常識的に考えれば、悪趣味な合成映像であるか、もしくは、前に撮影済みの映像が重ね取りした際に磁気ヘッドの不具合で消去しきれず表に残ってしまった、ということだろう。

しかしそう思って見てもいかにも不自然な映像であり、やはり一般的には、

大統領の無念の魂が写ってしまった、

いわゆる「心霊ビデオ」と見るのがもっとも自然だろう。

それにしてもこれだけ歴史的瞬間を撮した映像に、これだけはつきりした心霊現象が写ってしまった例は他にないのではないだろうか？

さてようやくであるが、紅倉美姫にこの歴史的心霊ビデオの真贋を鑑定してもらおうというのである。

スタジオで紅倉に見てもらうのはかの国の国営放送のニュース番組を録画した物である。

モニターでニュース番組のビデオを見た紅倉は、

「ふうん」

と、いつものように顎に指を当てるお得意のポーズを取って鼻にかかった声を出した。ぴくりと眉をつり上げまぶたを震わせると、眠そうにまぶたを重くしてモニターを見つめ、ビデオが終わると、「ふう」

と疲れたようにため息をついた。

と思うとカメラを見て目を輝かせ、にっこり笑った。

「これは心霊的にも世紀の決定的瞬間が写ったビデオですね。ここには人が死の瞬間にどうなるか？という答えが写っています。まさに決定的瞬間なんです、分からないでしょうから詳しく解説しましょうね」

三、紅倉版「魂とあの世の解説」

このスタジオ収録にはゲストはおらず、紅倉と芙蓉と、顔なじみの天衣喜久子が進行役としている。

異様なのが雛壇の客席で、

紅倉美姫は”Medium Benikura”として広く海外でも有名で、今回自国の歴史的映像が鑑定されるということではるばる東欧から五十人もの同国人が見学に訪れていた。

彼らは十代後半から七十歳くらいまで広い年齢層の男女で、白い肌に黒髪、大きな黒い瞳をした者が多く、通訳なしで分からないのだろうが、いささか怪訝な目でじいっと彼女の解説に聞き入っていた。

「さて。

死んだら人はどうなるのか？ 誰しも考えることでしょう。

そもそも人間に魂なる物があるのか？、との問いにはわたしは立場上『ある』と答えします。

これは以前も話したことがありますが、魂とは計測によると21グラムの物質のようですが、わたしの経験上の見解を言えば、その本質はその上に載ったその人の人生の記録です。魂にはその人が生まれて、死ぬまでの、全生涯がすべて記録されているのです。

さて。

魂に記録されている全生涯とは、いったいどのようなものなのでしょうね？」

紅倉はお茶目に笑顔で問いかけ、聞き役の天衣と芙蓉は難しく首を傾げ、紅倉が視線を向けると客席の東欧人たちは変わらぬいぶかしげな目でじっと見返してきた。

「人は死ぬ瞬間にそれまでの人生が走馬燈のように脳裏に甦ると言いますよね？ ああ、ところでわたし走馬燈って見たことないんですけど、ろうそくの灯りで影絵がくるくる回る提灯みたいな物なの？ まあどうせわたしには見えないからどうでもいいわ」

番組をご覧の皆さんには周知のことだが紅倉はひどく目が悪く、全く見えないわけではないようだが、本人曰く「水に滲んだ白黒映像」程度にしか見えないようだ。

「さて、死ぬ瞬間に走馬燈のようにそれまでの人生が甦る、と言っているのはいわゆる臨死体験をした人たちで、まあ実際には生きている人たちです。死にそうになったけれど死ななかった、またはいったん死んだ状態になったけれど生き返った人たちで、いずれにしてもこの世に生きている人たちの証言です。

本当に死んでしまった人たちがその瞬間にどうであったのか？

は、死人に口なしですから誰にも分かりません」

と、自分は知っているであろう紅倉はおどけて手を開いた。

「偉い学者の先生なら死の瞬間に見る走馬燈のような人生のイメージを、脳にしまい込まれたそれまでの記憶が死の瞬間の激しい電気信号によって一気に読み出された事による現象だ、と解説するでしょう。

それに異存はありませんが、わたしはインチキな霊能者ですから『魂』というオカルト的道具立てで解釈をします。

死の瞬間、

自分の体を離れようとする魂は、この世と別れてあの世に行くために、その接続を切ろうとします。

そのために、この世の霊的ネットワークは、その魂を切り離してしまっていないものか、一度そのデータを検索します。

データを検索された魂は、その瞬間に世界のすべてとつながり、と言ってもそのネットワークは巨大すぎてすべてと双方向につながることは出来ませんから、自分に関係のあるデータだけピックアップされ、それらと相互に検索し合うことになります。関係のあるデータだけと言っても一人一人が一生の内に関わる『世界』というのはそれだけで膨大な物で、それと一気につながるわけですから実はものすごいエネルギーを消費しているわけです。超高感度カメラで撮影すれば死の瞬間に魂の出入り口である首の後ろが白く光るのが見られるでしょう」

そうなのかしら？と芙蓉と天衣は顔を見合わせたが、二人にそれを確かめるすべもなく、紅倉はけっこうその場のノリで口から出任せを言うのであまり真に受けては馬鹿を見る。

「これも前に言ったかしら？

21グラムの魂の本体は今風に言えばUSBフラッシュメモリ？みたいな物で、取り外し、差し替えの出来るコンピューターの記録メディアみたいな物です。

ところでその構成物質であるエクトプラズムは自然界に当たり前にある物です。つまり、この世界の魂となり得る物質が地球上あらゆる場所に存在しているわけで、事実、この世界は『地球の魂』とも言える物を持っています。

ただ、それをメルヘンチックに、純粋な子どものように愛らしい物と考えるのは幼稚な夢想です。

言ったように、魂の本質とはそこに載った記録データなのです。地球の魂にも当然地球が生まれてこれまで生きてきた全生涯のすべ

てが記録されています。

人や動物や植物やその他物の魂をリムーバルのフラッシュメモリとするなら、地球の魂は地球に内蔵された巨大なハードディスクと言っているでしょう。

人間の魂のネットワークも巨大な地球の魂に属しながら、その全体に接続することは不可能です。それが可能としたら……それこそ神様だけ、なんでしょうね。

さて。

人間は死んだらどうなるか？という話でしたね。

肉体と魂が分かれ、肉体は機能なくなり、いずれは朽ち果てます。

皆さんは魂こそが人間の本質である、と思いたいでしょうが、残念ながら違います。

生きている人間にとって魂なんておまけみたいな物で、まあ、ただの記録メディアに過ぎませんからね。

生きている人間の本質は間違いなく肉体にあります。

ただ、」

紅倉は時々やるものすごく意地悪な笑いを浮かべた。

「肉体から切り離された段階で魂は新しい生きるための肉体を探します。

しかし、くどいですが、魂はただの記録メディアに過ぎないので、自分でその新しい肉体を探す力はありません。ほぼ一方的に次に所属すべき状態を決定されると言っているでしょう。

閻魔大王という存在は確かにあります。

人は死ぬとその魂は三途の川を渡って閻魔庁に送られ、生前犯した罪を浄玻璃鏡（じょうはりのかがみ）に映されて閻魔大王はじめ十王の審判を受けて地獄、極楽、その中間の輪廻道（りんねどう）、いずれかへ行くことを決められます。

浄玻璃鏡にはその者の生前の一挙手一投足がすべて映し出され、またその人生が他人にどう影響を与えたか、また他人がその者をどう思っていたか、まで映し出されると言います。

つまり、浄玻璃鏡とは単にその魂の記録データを検索するだけではなく、ネットワークを介したもっと広範な検索を行うのです。

さて。

この閻魔さまの話をさっきの地球の魂とそこに属する人間の魂のネットワークに当てはめると、

人間が死んで魂が三途の川を渡ると言うのは、魂が肉体と別れる現象を言うのであって、まあ、三途の川自体はここ」

と紅倉は自分の首の後ろを触った。

「にあると言っていていいでしょう。

三途の川を渡った魂は行くべき世界を決める閻魔庁に送られるわけですが、それは肉体を離れた魂がその瞬間に地球の魂のネットワークに接続することであり、閻魔庁とは魂がネットワークにつながった状態のことを指します。

さて、では魂を裁く閻魔大王は何者かと言えば、魂を検索するネットワークその物であり、具体的な十王と言えば、それは『関係あり』と検索されて魂に接続したネットワーク中の各データと言うことになります。

ここで」

紅倉はいかにも「ポイントですよ？」と言うように指を立てた。

「重要なのは、魂の接続というのは、ただ単にデータを読み取られることではなく、文字通りコンピューターに接続し、こちらも検索する相手のデータを読むことになる、と言うことです。

双方向、インタラクティブ、なんですね」

難しい言葉を知ってるでしょう？と紅倉はえっへんと威張った。

「つまり、魂は生前関わった人たちの主観で自分自身を見つめることになります。

まあ、具体的に簡単な例を挙げれば、

人を殺した人間が、

殺された人間に成り代わって、

自分に殺される体験をする、

と言うことです」

紅倉は平気な顔で言っているが、いささか得意になっているように見えるのは気のせいでもあるまい。

「逆に人に殺されて死んでしまったような魂の場合、肉体を離れて魂のネットワークにつながった時点でその強い感情、

怒りや、憎しみや、悲しみや、無念さを、

接続したハードディスクに書き移して、感情的にはフラットな状態になります。これが上手くないかないと、ネットワークから弾き出されて、あの世に行くことが出来ず、現世をさまよう幽霊になってしまうわけです」

お分かり？と紅倉は客席に小首を傾げてみせた。観客の東欧人た

ちは難しそうに顔を曇らせてじっと紅倉を見続けた。

「上手くフラットな状態になれた魂はネットワークの検索を経た後、それぞれにふさわしい次の世界に送り出され、将来別の肉体に生まれ変わる者はハードディスクにとどまって、生まれ変わるまでの時間を現世の時間の流れと共に過ごしたり、ネットワークのバーチャルリアリティーの中で過ごしたりします。

完全なあの世、

天国や、

地獄

に行く魂は、それこそ完全にこの世の魂から切り離され、『別の世界』へ行きます。

天国という物がどこにあるのか？

地獄という物がどこにあるのか？

それはこの宇宙という物の成り立ちに関わる問題で、無学でおバカなわたしには分かりません。

わたしたちの一般的な認識での『この宇宙』にはない、と言うことだけはわたしにも分かります。

魂に行くべき世界を選ぶことは出来ない、と、いかにもネットワークに強要されるように言いましたが、そうではないんです。

魂は、正直に、自分が一番行きたい世界に行くのです。

すべての魂は天国に行くことができます。

ただ、それはその魂の主観で『天国』に思えるだけで、客観的にはそれは『地獄』に見える物もあります。

自分の欲のために人殺しをするような人間が、全く暴力や欲のな

い世界に行って、のほほんと平和に暮らしていることなんて出来ないでしょう？

天国とは、似たもの同士の魂が集まって作ったバーチャル空間なんです。

人殺しの魂は人殺しの魂ばかりのネットワークに入り、そのバーチャル空間で新たな肉体を得て暮らし、そこで自分たちの好きな社会を作るのです。

好きなだけ殺し合って強欲をあさればいいんです。

そこにはどうせ自分と同じ魂の人間しかいないんですからね。

殺し殺され、永遠にもしろ可笑しく生き続ければいいんです。

まさしく『天国』でしょう？」

ふふん、と口の端をつり上げると、これまたよくやる白けきった目つきで続けた。

「ま、その程度の『地獄』は輪廻道に属する物が大半で、ですからそこに送られた魂は、心底本気でそんな生活に嫌気が差せばそこから抜け出すことが出来ます。ですが三つ子の魂百までもと言いますし、ま、百年くらいは軽ーくかかるでしょうがね。

本物の『地獄』はそんな愉快なところではありません。

それは本当に救いような魂の、ゴミ捨て場のような物です。

どこにも所属すべき世界を見いだせず、完全に接続を切られ、あらゆるネットワークから切り離され、放出された魂が、巨大な重力、ブラックホールに捕まって、この宇宙の終わりまで永遠にありとあらゆる物を、当然自分自身さえも、呪い続け苦しみ続けるまさに無限地獄です。

これは我々の認識しうる宇宙の別の次元の話ですから、わたしに

もそのほんの入り口しか分かりません。

その中身は、無限の狂気の世界、なのでしょう。

わたし、これでも一応まともな人間のつもりでいますので、とてもじゃないですがそんな世界理解できません。あー、怖い怖い。

逆に本物の『天国』は、これは悟りきった100パーセント平和そのものの魂がこの宇宙を解脱して到達する限りなく揺らぎのない世界ですから、これまた俗物のわたしにはまったく理解できません。ま、わたしなんて宇宙の終わりまで永遠に縁のない世界でしょうね。

ちょっと話が大きくなりすぎて、わたし自身しゃべっていてちんぷんかんぷんになってきました。

もっとうんと俗っぽい、わたしの直接知っている、お化け系の話をしませうか」

四、魂の話と、「いきげんよう」

「天国と地獄、なんて話をしても信じない人には全くばかげたおとぎ話にしか思えないでしょうね。」

改めて、魂とはどんな物か、と言う話をしましょう。

そもそも人は死ぬときどうなるか？と言うのがスタート地点でしたね。

人が死ぬと魂が肉体を離れ、その際にこの世界の魂に接続してネットワークの検索を受けるというのは話しました。

人の魂がUSBフラッシュメモリみたいな物で、その本質が記録データであるというのも話しました。

ここで一つ付け加えると、

魂のデータというのは、移動する物であり、コピーされる物ではない、のです。

例えば先ほど殺人によって命を落とした魂がネットワークに検索される際、その怒りや憎しみと言った感情がハードディスクに移されて魂は感情的にフラットな状態になる、と説明しました。

つまり、魂に記載されていた『感情のデータ』がハードディスクに移動されて、魂から消去されるわけです。

データは移動しますが、データそのものが消去されることはありません、永遠に。

ハードディスクに移されたデータはそこにとどまり、例えば、その人を殺した犯人の魂に接続し、そこに書き移され、ハードディス

クからは消えます。

ハードディスクからデータは消えますが、移動履歴は残ります。

さて。

今の話で魂とはどういう物か？、主観的な性質が分かりました？」

紅倉はどう？と期待して問うたが、芙蓉も天衣もさっぱり分からず、客席の東欧人たちはそもそも何を話しているのかさっぱり分かっていないようだった。

ろくに見えていない紅倉はお構いなしに得意になって話を続ける。

「魂は生きている肉体にとっておまけみたいな物で、全然その人間の本質なんかじゃない、と言いました。

これを聞いて、やっぱり人間死んだらそれまでだと、性根の腐った犯罪者なんかはほっとしたと思いますが、

ま、そう思ったってかまいませんよ。

そう思って盗みでも人殺しでも勝手にやるがいいです。

ただ、

魂には、自分と肉体、なんて区別は付きませんよ？

自分は自分であり、そこに物思う自分がいる限り、どう頑張ったって自分という物を否定なんて出来ません。

くだいですけど、魂にはその人のすべてのデータが書き記され、そのデータは、肉体が死ぬ瞬間に完全に魂に移動し、肉体には『自分』という意識はいつさい残らないのです。

そう、生きている人間にとっても魂は一つ大きな役割を持っている、それは、

意識の定着です。

魂が抜けたような顔、なんて言うでしょ？

感情のない、ぼーっとした顔つきです。

そういうとき魂は肉体を離れて、いわゆる『生き霊』の状態であることが多いんですけどね。

お化けの事件で生き霊というのはなかなかやっかいな物で、死んだ人の魂よりずっと自己主張が強く、怨念が強い場合が多々あります。

でも、そうして生き霊の起こした心霊事件を、当の肉体は全然覚えがないのが普通です。それは肉体の脳に記録データがないからです。から当然です。

つまり、

人間の肉体は魂なんてなくなっちゃってちゃんと働くけれど、意識の連続が途絶えてしまうんです。

いや、生き霊の事なんて全然知らなくて、その間の意識も記憶もはつきりあるぞ、と当人は言うでしょうが、それは脳が肉体として働いているのであって、確実に『自分』という意識は低下しているはずです。

例えばですね、こういう経験をしている人はいませんか？

鏡で自分の顔を見て、なんとなく知らない顔のような、自分ではないように思えてしまう、というような経験？

これは魂が精神的なストレスや病気などの体の衰えによって肉体から離れかけているか、『悪霊』というような他人の魂が接続している場合が考えられます。

人は生きている間『自分』という認識の主体は肉体にありますが、肉体が死ぬと、『自分』という意識は魂に移動するのです。

ですからね、

生きている間は魂なんて自分の考えや行動に全く関係ない物ですけど、死んだ瞬間に『自分』は魂になるんです。

『自分』として人生を歩んだ肉体と、
その人生の単なる記録装置である魂は別物です。

ですから今生きているあなたと、死んだ後の魂はもともと別の物
です。それを今生きているあなたが『魂なんてどうでもいい』と否
定するのは自由ですし、それはメカニズムとして正しいとも言えま
す。

が、

『自分』であるあなたに、生きている今の肉体の『自分』と、死
んだ後の魂の『自分』の区別は付きません。

『あなた』は永遠に『あなた』であり、何度輪廻を繰り返そうが、
『自分』という意識から逃れることは出来ません、永遠に」

紅倉は、それがさも残酷なことのように、ニンマリ意地悪く笑っ
た。

「さて。

わたしにとってはみんな当たり前の知識なんですけれどね、改め
て説明しようとするはずいぶん面倒くさいですね。

魂にはその人のすべてが記録されている。

ではその『すべて』とはどういう物なのでしょうね？

さっきからわたし『地球の魂』とか『ハードディスク』とか『宇
宙』とか、普段使わない単語ばかり言ってますけれど、しよせんオ
カルトの心霊現象をSFの道具立てでそれっぽく言ったって所詮眉
唾物だほとんどの人は思っているでしょう。

魂だの魂のネットワークだの、そんな物がこの世界のどこに存在

しているんだ？

と、まあ、普通は信じませんよね？

わたしも頭悪いんでよく理解できてないんですけど、そもそも宇宙って、『時間の流れ』と言い換えてもいい……んじゃない？」

紅倉はこれはあまり自信なさそうに芙蓉と天衣に訊いたが、残念ながら芙蓉も天衣も基本的に文系人間でそういう宇宙物理学みたいな話はさっぱりだ。紅倉は諦めて勝手に自分で頷いて納得した。

「まあ、そうだと思うのよ。」

この世界でそういう仕組みが成り立っているのは宇宙の構成要素である『時間』が大きな役割を担っている、と思うのよ？よく分からないけど。

で。

魂に記録されているデータには、データとしての『時間』が記録されている、はずなのよ。

これがどういう意味か、分かるかなあ……？」

紅倉は悪戯っぽく、しつこいくらいニヤニヤして人々を見回した。

「人が死んで魂をネットワークに検索されるとき、そのデータをすべてロードされる、ということは、そこに含まれる『時間データ』もロードされ、つまり、魂の主観では、自分の人生をもう一度、と言わず、検索されるデータの数だけ、何度でも、繰り返し生き直す、ということよ。」

ちよっと違うわね。

接続されたデータの主観で何度も自分の人生を生き直す、という

ことだったわね」

「うん」と紅倉は満足そうに頷き、ニッと恐ろしい目つきで笑った。

「人殺しの例を話したわね？」

自分が殺した人間の主観で自分に殺されるって。

それは単なる記憶としてではなく、『時間』も主観で体験するのよ。

客観的にはデータの検索はほんの一瞬のことです。

が、

魂の主観は、何年、何十年、何百年、ひょっとして、何千年と、オンタイムで時を過ごすのです。

それでこのビデオの意味が分かるでしょう？」

ディレクターは慌ててビデオを再度再生し、不気味な心霊現象のカット目を見開いた恐ろしい大統領の顔でストップした。

「魂の検索は死んだ瞬間のほんの一瞬で済むのがたいいです。

が、接続されるデータが膨大な数であったため、こんなにも長く、数秒間、ロードに時間がかかってしまったのです。

この大統領は、死の瞬間から数秒間で、おそらく何千年の時間を過ごしていたのです。それももの凄い濃度の体験をして。

この顔を見ればそれがどれほど恐ろしい体験であったか分かるでしょう？」

カット目を見開いて恐怖の叫びをあげる大統領は、スローモーション

ヨンで再生がスタートし、もの凄い叫びに自ら引き裂かれるように、粉々の霧になって消え、元の死体の肉体に戻った。

「この人が歴史的にどう評価されるべき人なのか、わたしには分かりません。

が、これだけ人の恨みを受けているのですから、まさに自業自得なんですけれど、哀れですね。

かわいそうに、彼の魂は壊れてバラバラになってしまったようですね。

魂は永遠なんですけれどね、こうなってしまっただけはもう『自分』は保てませんね。

バラバラの断片だけが永遠に漂い続けるだけです。それでも『地獄』に追放されることはなかったようですから、それが大統領としてのせめてもの業績ということでしょうか？」

紅倉は興味なさそうな顔で肩をすくめた。
気を取り直して。

「ああ、走馬燈です。

臨死体験をした人が一瞬のうちにそれまでの人生のイメージを見るのは、魂が一度ネットワークに接続して検索されたからですが、魂の主観では何十年の人生も、肉体的にはほんの一瞬の時間に過ぎませんから、魂が死にきれず肉体に戻った際には改めて肉体の時間で『走馬燈を見た』という記憶が客観的に再認識されるのです。

ああ、一つ注意。

人を呪わば穴二つと言います。

人を呪う者は自分も呪い返されると言うことです。

魂の検索は一方的なものではなく、コンピューターに接続した双

方向のものです。

人への恨みが的はずれな身勝手なものであるなら、それはそっくり自分に返ってきます。

閻魔大王は公平な正義の人ですからね。

さて、とお………」

紅倉は他に言い忘れていることがないか顎に指を当てるお得意のポーズで考え、大丈夫なようにつこり笑った。

「では最後にこのビデオテープを浄化して終わりにしましょうか。

昔の人は写真は魂を吸い取ると恐れたようですけれど、全く迷信とも言えないんですね。

写真に写った像はもう一人の自分ですから、その瞬間の魂を持ってしまうんですね。

ビデオなら尚更その時間が長く、情報量も多くなってしまうと言うわけで、やっぱり心靈写真とか心靈ビデオとか言うのは接する人、見る人に悪い影響を与えてしまう恐れがあるのでクリーニングしておきましょう。

この」

と、薄笑いを浮かべてモニターを眺め、

「哀れな魂をここから解放してあげましょう。どうせたくさんあるコピーの一本だからかまいませんよね？

カメラさん、準備はいい？

今からここでこのビデオを再現してあげますから」

と、紅倉は右手を開いてテーブルの盤面に開いたモニターに被せ

ると、グッと、何か掴み取り、ポイと放り上げた。

バチイイツ！、

と、スタジオいっぱいに閃光がスパークし、パアンツと照明がすべて消えた。

真っ暗闇でスタッフの慌てた声が飛び交い、やがて元通り照明がついた。

「あー、びっくりした」

と天衣が目をぱちくりさせて言った。

「カメラ大丈夫ですか？ 回ってます？ はい。」

先生。今すごい光が爆発したみたいになって照明が消えちゃったんですけど、今のは、なんだったんでしょう？」

「ちょっと無茶だったかしら？」

紅倉はてへ、とお茶目に舌を出した。

「すみません、失敗しちゃいました。やっぱりもの凄いエネルギーの放出になっちゃいましたね。」

面白い現象だったんだけどなあー、撮れたかしら？」

「ただいまスタッフが先ほどのVTRを確認していますから少々お待ちください。……………」

いいですか？

はい、どうやら照明の切れる瞬間までの映像は撮れているようです」

先ほどの閃光の発生が映し出されるが、閃光が爆発した次の瞬間、真っ暗になってVTRは途切れてしまう。

しかし目のいい芙蓉が何か見つけて「うん？」と眉をひそめた。

「今の瞬間をスロー再生してみます」

紅倉がモニターから手を上げて斜め上に掴んだ物を放り投げて、そこにパツと白い光が現れると、客席の雛壇からいくつもの白い光が立ち上がって、前方の白い光と光線で結ばれ、その数十本の光線が太く膨れ上がり、真っ白に巨大な閃光となり、そしてブツツと途切れた。

「どう？」

と紅倉に訊かれて芙蓉が指摘する。

「前方の一つの光と客席の光たちが線で結ばれる画で止めてください」

再びVTRが超スロー再生され、気づいた天衣があつと声を上げ、映像は一時停止した。

スタジオ全体をステージ側から撮った画。

ステージ上の宙に簡素なジャンパーを着た男性の後ろ姿が立ち、雛壇いっぱいには白い人影が立ち、その丸い顔面から光の線が発射され、後ろ姿の男性の顔につながっている。

「ニュースのVTRを確認してください。大統領のお化けは消えていると思いますから」

紅倉の指摘で再生してみると、確かに、死体の顔に二重写しのようになっていた不可解な恐ろしい白い顔は消えていた。

「はい、ちょっとした手品でした。わたしが消した、と言うか引っぱり出したのはこのコピーのビデオテープからで、歴史的に貴重なビデオテープには大統領のお化けが写ったままになっていますから早とちりして怒らないでくださいね？」

天衣は怖そうに客席を見た。

「先生。わたしずっと気になっていたんですけど、客席に、誰か居たんですか？」

「ええ」

紅倉は天衣にっこり笑いかけて言った。

「その、さっき説明した天国の一つからね、ゲストをお呼びしてきました。

あっちのテレビにも生中継されていてあっちの皆さんもご覧になっていたはずですよ。魂のネットワークは光通信完備、地球の裏側だってストレスなしにあっと言う間です。

もう皆さん成仏されて、別の天国に移動して吸収合併されています。

一つ天国を消滅させてしまいましたけど、ま、こういうのはかまわないわよね？」

客席にいた東欧人たちは皆姿を消している。この小説は紅倉の主観にアクセスしたスピリットからの情報を元に書かれているのであしからず。

「さて」

と紅倉はカメラを見る。

「わたしのテレビのお仕事はこれでお終いです。

こんなわたしでもお仕事をさせてもらってお金をいただいて、とても嬉しかったです。

皆さん、これまでご覧いただきありがとうございます。

わたしは明日からふつうの綺麗なお姉さんになってふつうの生活を送らせていただきます。

それではみなさん、

「ごきげんよう」

こうして現代最強の霊能力者と称えられた紅倉美姫は人々の前から姿を消した。

おわり。

四、魂の話と、「いきげんよう」（後書き）

＊ありがとうございます。

「お札さまの花嫁」後、シリーズは休止し、もう小説書くのやめようかなあ……、と思ってました。

読者さまに応援のコメントをいただき第2シリーズを開始しました。この「最終回」から一つ順番が逆になってしまいましたが「幽霊の棲む家」「ショウ君が消えた」と第2シリーズへ続きます。

「ホラー」がどういふところから発生するか考えるとどうしても重苦しい話が多くなりがちですが、読んでくださる読者さまには心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

現在紅倉シリーズはかなり迷走しておりまして、読んでくださいます皆様にはかなり苛々した気分を与えてしまっていると思うのですが、申し訳ございません。

……まだ迷走は続きそうです。

第2シリーズも「猛犬バスカヴィル」を最後に実質的に終了して久しいですが、第3シリーズはどうなるのか？ 実は構想はある程度できているんですが、なかなか取りかかれる状態にありません。（ファンタジー物をどうしようかなあ……とまだ迷ってまして）

今回ちょっと久しぶりに紅倉の出てくる紅倉物を書いたら、早い早い、予定よりだいぶ長くなっただんですが3日ほど書き上がりまして、まあ内容は過去作品からの引用で作品世界の設定を解説したような物なので退屈だったと思うんですが、書いている本人はとても楽しかったです。

こういう形になるか分かりませんが、また書きますのでよろしくお願ひします。（2010, 10, 04）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1375o/>

霊能力者紅倉美姫 最期のビデオ

2010年10月12日20時09分発行